

将来不安の中の若者たち

久木元 真吾

(公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員)

1. はじめに

2004年に実施された、高校3年生に対するある調査¹⁾の中で、「社会でうまくやっけていけるか不安だ」という文について、自分にあてはまるかどうかをたずねた質問がある。「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4つからいずれか1つを選ぶ形だが、それぞれを選んだ割合は、順に33.9%、41.8%、17.8%、5.1%であったという。つまり、合計して全体の約4分の3が、社会でうまくやっけていけるか不安であると回答していることになる。

また、2007年に実施された、20～34歳の男女を対象とする別の調査²⁾でも同じ質問がなされているが、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」を選んだ割合は、それぞれ12.5%、33.9%であったという。この調査は高校生ではなく、すでに社会に出ている者も多く回答していると考えられ、そのため割合は少なくなっているが、それでも合計して全体の半分に迫る割合の人が、社会でうまくやっけていけるか不安であると考えていることがわかる。

高校生やティーンエイジャーのような人たちにとって、自分たちの将来のことが不安に思われるというのは、比較的理解しやすいことであろう。しかし、上に挙げた後者の調査結果にみられるように、30代前半の人まで含む調査でも、将来の不安を表明する割合が決して少なくないことには、戸惑う人もいるかもしれない。

「若者」というものが、就職・結婚など、社会

的な立場のさまざまな面において、未決定の状態から決定された状態へ移行していく存在のことだと考えるならば、若者がそうした移行を前にして自分の将来について不安を感じることは理解できることであろう。しかし、「未決定の状態から決定された状態」への移行というのは、現時点では「若者」（あるいは「大人」）に関する記述としては、いわばあまりに古典的なものである。久木元（2009）では、若者の大人への移行が論じられる際に、従来は①その移行が一方向的で不可逆的な性格をもち、かつ②関連する様々な面での移行のタイミングが近接し、さらに③誰もがその移行を経験するという前提に基づいて論じられてきたとして、そのような前提に基づく移行モデルを「古典的な移行モデル」と呼んだ。現在では、こうした移行モデルは必ずしも一般的なものではなくなりつつあり、誰もがスムーズに移行ができるとは限らなくなった結果、未決定な状態を生きる期間が長くなっているのが実情である。そうした中では、若者たち（しかも、従来の「若者」のイメージよりも高い年齢の人たちまで含めて）にとって、自らの将来に不安を抱くことは自然なことといえるかもしれない。

本稿は、広い意味の「若者」たちの生活意識を、彼ら／彼女らが抱く将来への不安や展望を切り口にして描き出すことを試みるものである。広い意味の「若者」と書いたが、ここでは具体的には、東京・神奈川・埼玉・千葉の各都県在住の、20代後半から30代終わりまでの未婚男女をさす。彼ら／彼女らへの調査データをもとに、現代日本

図表-1 将来に関する意識の分布

	明るい	暗い	計
不安	26.0	56.9	82.9
非不安	12.1	4.9	17.1
計	38.2	61.8	100.0

注: 1) 2009年調査(東京および近県在住の25~39歳の未婚男女)による。以下の図表も、すべて同調査による

- 2) 表中の数値は、全体を1とした場合の割合(%)。全体の人数は2,471人。端数は四捨五入しているため、個々の値の合計と合計欄の値が必ずしも一致しない
- 3) 「不安」は、「将来に対して不安を感じることが多い」に「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答した人の割合。「非不安」は、「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」と回答した人の割合
- 4) 「明るい」は、「自分の将来の見通しは明ると思う」に「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答した人の割合。「暗い」は、「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」と回答した人の割合

の「若者」にとって自らの将来がどのように映じているのかについて把握するとともに、「若者」として長い期間を生きるという経験について考察することをめざす。

2. 不安な若者たちの明るくない将来?

——将来に関する意識

まずここでは、現時点の「若者」たちの意識、特に自分たちの将来についての意識を、大づかみに把握することを試みる。具体的には、2009年3月に筆者が実施した調査をもとに、特に将来に関する意識についての結果について、簡単に分析を加える。この調査(以下、2009年調査と呼ぶ)は、東京・神奈川・埼玉・千葉の各都県に在住する、25~39歳の未婚男女2,471名(男性1,235名、女性1,236名)を対象に実施した調査である³⁾。本稿において分析の対象となるのは、すべてこの2009年調査のデータである。

ここでことさらに「若者」とカギ括弧をつけているのは、調査の対象者が39歳まで含むからである。30歳代の後半に達している人を「若者」と呼ぶのは決して一般的な表現とはいえないかもしれない。しかし他方で、30歳代後半であっても、未婚の人や非典型雇用の仕事についている人が決して無視できない程度に存在しているのも確かであり、「若者」として広く検討の対象に加えることは十分に意味のあることだと考えられる。

この調査の中で、いくつかの質問文を挙げて、それぞれについて自分の考え方や生き方にあては

まるかどうかを、「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」の中から選んでもらうという形の質問をしている。ここでは特に、自らの将来に関わる2つの質問文についての調査結果を取り上げよう。1つは、「将来に対して不安を感じる人が多い」

であり、もう1つは、「自分の将来の見通しは明ると思う」である。それぞれについて、「よくあてはまる」「ややあてはまる」を選んだ人の合計割合をみると、前者は実に82.9%に達していた。後者については、「よくあてはまる」「ややあてはまる」を選んだ人の合計割合は38.2%である。つまり、それ以外の61.8%は、将来の見通しはいわば「暗い」と思っていることになる。したがって、ここでの「若者」たちは、その8割が将来に不安を感じる事が多く、6割が将来の見通しが暗いと思っているのである。自らの将来に対して、不安と否定的な展望をもつ若者がかくも多いということは、議論の出発点として把握しておくべきことであろう。

この2つの回答状況をまとめたのが、図表-1である。回答状況の組み合わせから、将来意識に関する4つの類型を抽出できる。すなわち、「不安・明るい」型、「不安・暗い」型、「非不安・明るい」型、「非不安・暗い」型である。

このうち、最も注目されるのは、「不安・暗い」型である。これは、将来に対する不安を感じる事が多く、かつ自分の将来の見通しも明るくないと回答した人たちで、このタイプは56.9%に及び、全体の過半数を占めている。25~39歳の「若者」たちの6割近くは、将来への不安を抱え、その見通しも否定的である。

次に多いのが、「不安・明るい」型である。これは、将来に対する不安を感じる事が多いが、自分の将来の見通しは明るいと考えるタイプであり、全体の26.0%を占めている。

図表-2 将来に関する意識の分布(男女・年齢別)

	年齢(歳)	「不安・明るい」型	「不安・暗い」型	「非不安・明るい」型	「非不安・暗い」型	計	n(人)
男性	25～29歳	27.7	51.5	15.3	5.6	100.0	412
	30～34歳	24.4	60.2	11.0	4.4	100.0	410
	35～39歳	21.3	61.3	9.9	7.5	100.0	413
女性	25～29歳	32.4	49.6	13.6	4.4	100.0	411
	30～34歳	27.6	55.0	14.0	3.4	100.0	413
	35～39歳	22.8	63.8	9.0	4.4	100.0	412

注: 1) 数字は%

2) 男性: $\chi^2 = 16.581, p = .011, d.f. = 6$; 女性: $\chi^2 = 20.324, p = .002, d.f. = 6$

「非不安・明るい」型は、「不安・暗い」型とは正反対に、2つの質問にポジティブな内容を回答した人たち、つまり将来に対する不安を感じることは多くなく、明るい将来見通しを持っていると回答した人たちである。このタイプは、全体の12.1%を占めている。

最後に、「非不安・暗い」型は、将来に対する不安を感じることは多くないが、将来の見通しは明るいわけではないという人たちである。最も少なく、全体の4.9%である。

ちなみに、詳細は省略するが、4種類の分布を男女別にみると、「不安・明るい」型は女性で、「非不安・暗い」型は男性でややその割合が多くなっているものの、10%水準での有意差にとどまっており、男女間で4種類の分布傾向が著しく異なっているわけではない。「不安・暗い」型と「非不安・明るい」型の割合は男女間で近い値となっており、将来への不安や見通しに関する以上のような意識の特徴は、男女を問わずある程度共有されているといえる。

ただし、ほかの基本属性は4種類の分布に影響を及ぼしている。まず年齢に関しては、大まかな傾向として、男女とも年齢が上がるにつれて「不安・暗い」型の割合が大きくなり、「不安・明るい」型および「非不安・明るい」型の割合が少なくなる(図表-2)。加齢に伴い落ち着いていくのではなく、将来不安や見通しの暗さはむしろ高まっているようである。

また、仕事の状況については、男女とも契約社員・派遣社員・パートおよび無職で「不安・暗い」型の割合が大きく、「非不安・明るい」型は

男性では正社員、女性では正社員および自営・家族従業者で相対的に多くなっている(図表-3)。年収については紙幅の都合もあり詳細は略すが、大まかな傾向として、男女とも年収が多いほど「不安・明るい」型および「非不安・明るい」型の割合が大きくなり、「不安・暗い」型の割合が小さくなる⁴⁾。

以上にみるように、将来への不安感・将来の見通しの両方でポジティブな回答をしている「非不安・明るい」型は1割強にとどまり、両方でネガティブな回答をしている「不安・暗い」型は過半数に達する。その背景には、年齢・仕事の状況・年収などの影響がうかがえる。こうした不安意識の広がり、山田(2004: 192)などでもその可能性が指摘されていたが、実際の調査結果からもそのことを確認することができたといえる⁵⁾。

3. 将来についての若者たちの言葉

続けて、「若者」たちの将来に関する意識について、より具体的なデータが得られる、別の質問項目について検討することにしよう。それは、2009年調査の最後に置いた、「ご自身の将来について、お考えになっていることを、ご自由にご記入ください」という自由回答項目である。実際には、次のような形で例示を加えてたずねている⁶⁾。

ご自身の将来について、お考えになっていることを、ご自由にご記入ください。

(例: 1年後に今のアルバイト先で正社員になる)

図表-3 将来に関する意識の分布(男女・仕事の状況別)

	仕事の状況	「不安・明るい」型	「不安・暗い」型	「非不安・明るい」型	「非不安・暗い」型	計	n(人)
男性	正社員	28.1	53.0	13.2	5.6	100.0	771
	契約・派遣・パート	14.4	73.8	6.2	5.6	100.0	195
	自営・家族	23.4	58.4	10.9	7.3	100.0	137
	無職	12.5	71.6	9.1	6.8	100.0	88
女性	正社員	31.3	50.0	14.5	4.2	100.0	552
	契約・派遣・パート	24.5	60.2	10.2	5.0	100.0	440
	自営・家族	32.1	51.9	14.8	1.2	100.0	81
	無職	18.8	74.2	4.7	2.3	100.0	128

注: 1) 数字は%

2) 「正社員」は「民間企業の正社員」「公務員等の正職員」の合計、「契約・派遣・パート」は「契約社員・嘱託」「派遣社員」「パート・アルバイト」の合計、「自営・家族」は「自営業・自由業」「家族従業者」の合計

3) 現在の状況が「その他」(男性12人、女性9人)および「学生」(男性32人、女性26人)の者は除いている

(例: 30代のうちに結婚して出産したい)

(例: 「やりたいこと」が見つかったが、挑戦すべきかどうか悩んでいる)

(例: 将来のことは気になるけど、今どうしたらいいのかよくわからない)

この質問に対して記入された自由回答のテキストデータを素材に、前節とは異なる角度から「若者」たちの将来に関する意識を探ってみる。

それに先立ち、自由回答の具体例をいくつか紹介しておこう。明確な選出基準を設けたわけではなく、必ずしも代表的なものとはいえないが、以降の議論を理解しやすくするためにも、ここで挙げておくことにしたい。

まず「不安・明るい」型である。現時点で不安を感じてはいるものの、将来の可能性に期待をかける言葉がみられる。「1年以内に資格を取得し、2年以内に福利厚生のあるしっかりした企業に転職したい」(男性、27歳、正社員)。「現在受講している通信教育を半年以内に修了し、関連する資格を取得して副業を始める」(男性、35歳、正社員)。「自分一人で生きていく、若しくは家族を持つにしても、お金はあるにこしたことはないので、稼ぐ力が必要だと思う。今の仕事は儲からないので、投資等の副業で稼げるような知識が欲しい」(女性、30歳、正社員)。「今年の目標は、年収を去年の2~3倍にする事。チーム活動やshow等の活動で自分をしっかり売り込んでもっと認知度

を上げて、色んなイベントや色んな活動をもっとできるようにする。……自分を信じてやっていけば絶対に何らかの形になると思って、今はDANCEを続けています」(女性、29歳、自営・自由業)。

次に、「不安・暗い」型である。最も人数の多いこの類型は、将来の不透明さと不安を吐露する例が少なくない。現時点で具体的な困難に直面しているわけでは必ずしもなく、現在は大きな問題がない人であっても、そのことが将来の不安を解消できるわけではないようである。「正直言って、自分の将来の像が見えない。誰と結婚し、どこに住んでいるのか?……自分の未来がまだ分からない」(男性、29歳、正社員)。「現在の仕事はストレスも多く体に負担がかかる。今までずっとやりたいと思うことがあったが、現在の仕事は収入だけは安定しているので、なかなか踏み出せない」(男性、31歳、正社員)。「勉強したいことがあるが、正直お金がかかる。今の給料では無理。かといって貯金もあまりない。お金があれば学校に通ったり、通信教育を受けたりして少しでも早く目標に到達できるのにと思うことが多い」(男性、38歳、派遣・契約・パート)。「会社の状況が思わしくないので、解雇・倒産などの最悪の事態に備えて何か資格を取りたい。基本的には今の会社に勤め続けるつもりではあるが、危なくなったらすぐに辞めて転職できるようにしておきたい」(女性、25歳、正社員)。「将来へのビジョンが漠然と

している。今のままで良いのか、打開した方が良いのかさえ悩む。親は結婚しろというが、離婚している友人知人を見ると、結婚する気が失せる」(女性、32歳、正社員)。「親を養っていけるほどの収入を得たいが、就職難の中、今の仕事さえクビにならないようにしなくてはいけなくて、とても活発に転職活動出来ない」(女性、35歳、派遣・契約・パート)。

続いて、「非不安・明るい」型である。不安も少なく明るい将来展望をもつこの類型では、明確なビジョンを伴うとは限らないものの、ポジティブに将来を語る例がみられる。「転職して地が固まってきたので、30代前半までには結婚したい」(男性、29歳、正社員)。「雑所得扱いの副業を、半年以内で個人事業主として登録。1年程度を目処に法人登記をしたい。3年程度を目処に関連することをやっている知人を雇えるようになりたい」(男性、35歳、正社員)。「自分の得意な分野がやっとはっきりしてきたので、それを追求したい。3年以内に結婚したいが、子供は産んでも産まなくてもいい。できたらできただ産休をとってその後復帰したい」(女性、32歳、正社員)。「今の仕事は、今までした仕事の中で、一番、福利厚生がよく、やりがいがあるので続けたいと思っている。家族と一緒にいることが、とても好きで幸せなので離れたいが、いずれは、独立したいと思っている」(女性、27歳、契約・派遣・パート)。

最後に、「非不安・暗い」型である。現時点の不安は必ずしも大きくないが、このまま将来も問題がないままであるとは思えない、微妙な意識がうかがえる例がある。「やりたいことが見つからず、現状に流されていることに、不安を覚えているが、かといって改善しようという意欲もない」(男性、37歳、正社員)。「派遣社員のままでは不安なことも多いけど、必ずしも正社員だからと言って安心できるものでもないで、現状維持で頑張る」(男性、35歳、契約・派遣・パート)。「今の会社をクビにならず、時給もずっと今のままでいたい」(女性、29歳、契約・派遣・パート)。

以上の例はごく一部にすぎないが、若者たちの将来に関する語り口の一端が確認できるのではな

いだろうか。

4. 自由回答における単語の使用頻度

次に、以上のような例を含む自由回答のデータについて、ごく簡単なものではあるが、計量的な面から検討を加える。具体的には、このテキストデータにおける、単語ごとの出現ケース数および全体に対するその割合を、男女別および前節で論じた将来意識に関する4類型別に調べてみた(図表-4、図表-5)。つまり、ある単語がどのくらいの割合で自由回答の中で用いられているか(自らの将来を語る際に、よく用いられている単語は何か)が、これらの図表で示されている。図表には、その割合が5%以上のものだけが挙げられている。

紙幅の都合もあり、限られた結果しか示すことができないが、特にここでは、将来の具体的な方向性や、将来に関する意識に関わる単語に注目すると、以下の諸点が指摘できる。まず男性についてみていこう(図表-4)。「結婚」への言及はどの類型でも多いが、将来展望が「明るい」2つの類型で特に割合が大きくなっており、いずれも2位の「仕事」を大きく引き離して最も多く用いられる語となっている。将来展望が「暗い」2つの類型では、「結婚」の頻度は少なくはないものの突出して多いということはない。また、「不安・明るい」型では、他の3類型では5%未満にすぎない「独立」が6.0%とやや高くなっている。「不安・暗い」型では、「転職」や「正社員」が他よりもやや多い。「正社員」が多いことは、この類型で現在の仕事の状況が非典型雇用の人が相対的に多かったことと呼応している。また「不安」という語にストレートに言及するケースも、この類型では7.4%と他にはみられない高い割合となっている。全体として、男性の場合、「結婚」「転職」「資格」「独立」「正社員」「不安」などの語が多く用いられていることがわかる。

続けて、女性についてみてみよう(図表-5)。女性の場合、「結婚」への言及が非常に多く、4類型のどれにおいても最も出現頻度が多くなって

図表-4 自分の将来に関する自由回答で用いられている単語(男性)

「不安・明るい」型			「不安・暗い」型		
語	ケース数	割合	語	ケース数	割合
結婚	69	22.8%	仕事	119	16.7%
仕事	47	15.6%	結婚	115	16.2%
今	40	13.2%	今	104	14.6%
ない	34	11.3%	将来	99	13.9%
将来	23	7.6%	転職	66	9.3%
転職	21	7.0%	ない	57	8.0%
自分	19	6.3%	自分	55	7.7%
独立	18	6.0%	不安	53	7.4%
資格	16	5.3%	正社員	42	5.9%
			いい	38	5.3%

「非不安・明るい」型

語	ケース数	割合
結婚	37	24.8%
仕事	19	12.8%
ない	18	12.1%
自分	15	10.1%
今	12	8.1%
転職	11	7.4%
会社	11	7.4%
将来	10	6.7%
資格	8	5.4%

「非不安・暗い」型

語	ケース数	割合
ない	20	27.8%
結婚	8	11.1%
仕事	6	8.3%
今	5	6.9%
転職	5	6.9%
会社	4	5.6%

- 注1: 「ケース数」は、自由回答の内容にその語が含まれていたケースの数
 2: それぞれの類型の全ケース数は、「不安・明るい」型は302、「不安・暗い」型は712、「非不安・明るい」型は149、「非不安・暗い」型は72
 3: 「割合」は、各タイプの全ケース数に対する、その語が含まれていたケースの割合
 4: 「割合」が5%以上のもののみを掲載している

いる。特に、将来展望が「明るい」2つの類型でその割合が大きい点は、男性の場合と同じだが、割合の値は5割に迫るほどであり、未婚の女性にとって将来を考える際に、結婚は言及されやすい語であることが確認できる。「結婚」に次いで多い「仕事」も、男性に比べてその割合は軒並み高くなっている。

将来展望が「明るい」2つの型で「結婚」を選ぶ割合が大きいのは男性の場合と同様だが、「出産」と「子供」も、将来展望が「明るい」2つの類型でその割合が大きくなっている。人数が最大の「不安・暗い」型では、「転職」「不安」などが他の類型よりも大きい割合となっている。男性の「不安・明るい」型にみられた「独立」の割合の多さは、女性ではみることはできず、「独立」は女性ではどの類型でも5%未満であった。「正社員」は男性では「不安・暗い」型でだけ5%を上

図表-5 自分の将来に関する自由回答で用いられている単語(女性)

「不安・明るい」型			「不安・暗い」型		
語	ケース数	割合	語	ケース数	割合
結婚	159	46.6%	結婚	226	32.6%
仕事	98	28.7%	仕事	174	25.1%
今	60	17.6%	今	107	15.4%
出産	46	13.5%	ない	96	13.8%
子供	46	13.5%	将来	93	13.4%
自分	29	8.5%	自分	90	13.0%
ない	25	7.3%	不安	90	13.0%
正社員	24	7.0%	転職	73	10.5%
転職	23	6.7%	正社員	61	8.8%
資格	21	6.2%	出産	54	7.8%
将来	20	5.9%	子供	51	7.3%
生活	18	5.3%	資格	46	6.6%
			生活	45	6.5%
			いい	42	6.1%
			何	42	6.1%

「非不安・明るい」型

語	ケース数	割合
結婚	68	45.0%
仕事	45	29.8%
出産	27	17.9%
今	23	15.2%
子供	18	11.9%
転職	10	6.6%
生活	9	6.0%

「非不安・暗い」型

語	ケース数	割合
結婚	14	28.0%
仕事	11	22.0%
今	10	20.0%
ない	7	14.0%
転職	3	6.0%
出産	3	6.0%

- 注1: それぞれの類型の全ケース数は、「不安・明るい」型は341、「不安・暗い」型は694、「非不安・明るい」型は151、「非不安・暗い」型は50
 2: 「ケース数」や「割合」の定義などは図表-4と同じ

回っていたが、女性では、男性に比べて非典型雇用の人が多いこともあり、「不安・明るい」型と「不安・暗い」型の2つの類型で多くなっている。そして、「不安」という言葉が直接言及される割合が高いのは「不安・暗い」型であり、その割合も13.0%と小さくない値である。全体として、女性の場合、「結婚」「転職」「資格」「正社員」「不安」などの語は男性同様多く用いられているが、さらに「出産」「子供」が加わっている。

5. 現状の「打開」と不連続なステージへの移行

以上の結果から、どのような含意が見いだせるだろうか。以下では、仮説的ではあるが、考察を加えることにしたい。

「結婚」「転職」「資格」「正社員」「不安」「出

産」「子供」「独立」——多くみられたこうした語を改めてみると、主観的な状態をさす「不安」を除くと、いずれも現状とは異なる新しいステージに移行することを含意する言葉であるといえるだろう。「結婚」「出産」「転職」「独立」などは、まさに今の自分とは異なる状況に将来移っていくことを示す言葉であり、「正社員」も、現在そうでない立場の者にとっては新しいステージへの移行そのものであろう。「資格」も、新しいステージに移行するための必携のアイテムとみなすことができるかもしれない。

注意すべきなのは、「現状とは異なる新しいステージ」であるということ、すなわち現状とは不連続なものであるという点である。つまり、そうした新しいステージは、今の自分と地続きに存在しているのではなく、もっと大きな自分の変化を伴ってはじめて到達するものである。見方を変えれば、現在の環境のもとで努力を重ねていき、そのことによって自然と事態が進んでいくとは見なされない。そうではなく、いわば現状とは異なる世界に跳躍していくこと、世界を一変させることが意味されているのではないだろうか。

仮にある会社に正社員として就職し、定年までその会社に勤続するという将来イメージが抱かれているのであれば、「昇進」のような、その組織内で上昇していくことを表す言葉が、将来を語る上で用いられると予想される。しかし実際に「昇進」という言葉が、同じ自由回答のデータにおいてどのくらい見られるかを調べてみると、全体でわずか3ケースにとどまっている（いずれも男性、「不安・明るい」型2名（0.6%）と「非不安・明るい型」1名（0.7%））。将来について語る中で「転職」や「資格」という言葉は頻出しているが、「昇進」はほとんど言及されていないのである⁷⁾。現在の状況に基本的にとどまった上で、少しでも望ましい方向へ前進をはかろうとする語りは、ごく少数にすぎないというのが実情である⁸⁾。

以上から浮かび上がるのは、多くの若者たちにとって、自らの将来は現在の状況をそのまま延長しても望ましい状態にたどりつくわけではないとみなされており、自らの状況に何らかの変化を起

こすこと、現状とは不連続な新しいステージにジャンプして移ることこそが求められているという状況である。かつて山田（1996）は、男性にとって結婚は「イベント」であるが、女性にとっては「生まれ変わり」であると論じた。つまり、女性にとっての結婚は、状況の大きな変化を伴うことがありうるという意味で「生まれ変わり」にも近いものであるが、男性にとっての結婚は、一つの「イベント」であるにすぎず、そこまで著しい状況の変化にはつながりにくい、というわけである。これにならば、現時点においては、結婚に限らず、そして女性に限らず、多くの若者たちが将来について語るとき、「生まれ変わり」の機会をいかに得るかという形で語られる傾向があるといえるだろう。リセットして仕切りなおすのであれ、ジャンプして高いステージに移るのであれ、現在の状況を何らかの方法で「打開」して、現状とは不連続な新しいステージに移行すること——そういう形で、将来は語られている。

ただ、このように述べると、あたかも多くの若者たちがチャレンジ精神に満ちており、より高いステージを積極的にめざしているかのようにイメージするかもしれない。あるいは、このような事態が「若者が我慢を忘れ、こらえ性がなくなった」からもたらされたと考える人もいるかもしれない。だが、おそらくそうではない。留意すべきなのは、すでに述べたとおり、6割近くの若者は「不安・暗い」型、つまり将来に不安を感じ見通しが明るくないと考えているということである。同じ会社に長期にわたり勤続するというキャリアのあり方が相対化される中、一人ひとりのキャリアやライフコースは、就職や結婚をしたとしても、大きな変動のない安定した道を歩むことが保障されるわけではなくなっている。逆に言うと、現在の状況に違和感や行き詰まりを感じたとき、それでも今の仕事を続けて、現在乗っているレールからは降りずに、異動などのタイミングに状況が変わるのをただ待つという方法は、かつてほどには現実的な選択には見えなくなっている可能性が高いのである。

また、結婚であれ転職であれ、現在とは不連続

な新たなステージに移行することで「打開」しようとするのは、それだけ現状が不安定で長期的な見通しをもちにくいから、という面も大きいのではないだろうか。具体例は省略するが、たとえ正社員であっても、現在の会社がリスクにさらされており、長期にわたって安定しているとは言いきれないという認識を語る例は、しばしば見受けられる⁹⁾。その意味で、この「現在と不連続なステージに移行すること」への志向もまた、積極的なチャレンジというよりは、リスク回避的な面をもっているといえる。

他方で、だからといって正社員という立場の価値が落ちているのかというところではない。結婚であれ正社員であれ、むしろそうした何らかの安定の確保にみえるものの価値は高まっている（と映じている）。現状が不安定で長期的な見通しがもちにくいからこそ、たとえばかつての「安定」イメージからは遠くまた別のリスク含みであったとしても、正社員も結婚も一層強く求められるようになるのも事実である。

2009年調査でカバーされている30代の「若者」たちまで視野に入れるならば、すでにその年齢までのキャリアの蓄積があることもあって、好むと好まざるとにかかわらず、リスクを伴う選択を簡単にはできない面もある。他方で、そういう状況であるからこそ、現状とは不連続な新しいステージに移行することは、現状を「打開」する「生まれ変わり」の方法として一層価値を帯びて映じることにもなる。また逆に、少しでも安定しているもの（正社員という地位、結婚など）を確保していることも、価値のあるものとして見られるようになっていく。こうしたさまざまな要素の交錯の中に、若者たちは置かれている。

将来への不安を感じつつ、今後の見通しも持ちにくいからこそ、「打開」のように現状が一変することを志向・期待する¹⁰⁾。そうしつつ、現状にあえてとどまるリスクと、別のステージに移行することを試みるもののリスクを見極めながら、また現実の諸条件も考慮しながら、自らの将来を見つめている——それが多くの若者たちの現状なのではないだろうか¹¹⁾。

6. おわりに

以上の考察から浮かび上がってくるのは、リスクをとるかとらないかの見極めと決断のタイミングの模索、さらにはチャレンジを見送ることや見切りをつけること、現状を受け入れざるをえないということを痛感すること、などを感じながら、若者たちが日々を送っているということである¹²⁾。いかにリスクを見極めるか、必ずしも望ましいとはいえない現状をいかに受け入れるか、今の状況を継続するかどうか、自分自身の意思はどうか——こうしたことが、20代から30代の終わりまで（あるいは、もっと先まで?）、日々の問い・課題となって迫ってくる。必ずしも差し迫った問いばかりではないかもしれないが、そのような問いのプレッシャーを常に背負い続けることは、決して楽なことではないだろう。

ここまで考えると、いかに現状を「打開」して新しいステージに移行するか、ということは、もはや直接の課題ではないのかもしれない。むしろ、おそらく一人ひとりにとって本当に課題となっているのは、長く続く、リスク含みの未決定な状況の中で、事態を「打開」したいのに簡単にはそうもいかないような毎日をどう生き延びるか、ということなのではないだろうか。別の言い方をすれば、好むと好まざるとにかかわらず完璧とはいえない現状が継続するという事態を生きること、どのようにして有意義な経験にしていくかということこそが、現在の若者たちにとっての、より直接的で差し迫った課題なのではないだろうか。

将来への不安と明るくない将来展望の中で、いかに生き延びるか——サバイバルという言葉の響きは大きさに聞こえるかもしれないが、若者たちにとっては決してそうではないのかもしれない。

*本稿は、科学研究費補助金（若手研究B）「若者の自立志向の形成における社会的ネットワークの寄与に関する研究」による研究成果の一部である。また、久木元（2010）と重なる内容を一部含んでいる。

注

- 1) 東京大学社会科学研究所による「高卒パネル調査 (JLPS-H)」の第1年度調査 (2004年)。対象は、全国の日制高校3年生7,563人。
http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/chosa-hyo/PH010c.html
- 2) 東京大学社会科学研究所による「若年パネル調査 (JLPS-Y)」の第1年度調査 (2007年)。対象は、日本全国に居住する20~34歳の男女3,367人。
http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/gaiyo/PY010g.html
- 3) 調査方法はインターネット調査である。回答者はすべて株式会社マクロミルのリサーチモニターである。調査の設計は筆者がすべて行い、調査の実施は同社に委託した。なおインターネット調査におけるサンプリングバイアスの問題については、本多 (2006) および石田ほか (2009) を参照。それらにおいても指摘されているように、インターネット調査の回答者は高学歴層の割合が高くなる傾向があるが、この調査の場合も、最後に通った学校が4年制大学または大学院だった人の割合は、男性62.5%、女性40.5%であり低い値では決してないといえる。以下の議論は、この傾向を前提として考える必要がある。
- 4) このように書くと、「不安・暗い」型イコール非典型雇用かつ低年収、とみなしてしまうかもしれないが、「不安・暗い」型は全体で過半数を占める多数派であり、したがって特定の特徴をもつグループに過度に還元することは適切ではない。事実、「不安・暗い」型の男性では、正社員の割合は他の類型より低いとはいえず5割を超えており、注意が必要である。
- 5) 東京・神奈川・埼玉・千葉の各都県在住の男性に調査を行った谷 (2009) は、20歳代・30歳代・40歳代のいずれにおいても、「自分の将来に不安を感じる可能性がある」という質問にあてはまると回答した割合が70%以上であったことを報告している。ただしこれは男性のみの結果である。
- 6) そのため、こうした例示が回答の内容に何らかの影響を与えている可能性は考慮する必要がある。
- 7) ちなみに「異動」も3例のみで、これら以外に、明示的に現在の所属先の中での上昇を含意する例は、「ラインリーダーになる」という1例 (男性、「非不安・明るい」型) ぐらいしか見られなかった (ただし、正社員になるといった、身分の変更を伴うものは別だが、これはむしろ「打開」の一例だといえよう)。
- 8) なお、多くはないものの、将来について「(現状) 維持」といった言葉で語る例もみられるが、その中には「将来に不安があるが、自力で打開できる状況ではなくしばらく現状維持するしかない」(女性、「不安・暗い」型) のような言葉もあり、現状に満足した上で維持という言葉を使っているとは限らない。
- 9) したがって、「ただがむしゃらに働けば道は開けてくる」といった議論は、そのままでは説得的にはなりえない。自らが置かれている環境自体がリスク含みな中では、そうしたリスクへの配慮なしにただ「がむしゃ

- ら」になるということは、リスクに鈍感になることを含意してしまう。
- 10) この自由回答項目で、宝くじの当籤や株・FXなどによって高額な収入を得たいと記すケースが26ケース (男性20ケース、女性6ケース) みられたが、これも「打開」への志向の表れだといえる。一見すると強欲さや単なる金銭的関心のようにみえるが、むしろ不安定な状況を脱したい (さらに、その具体的な展望が考えにくいので「生まれ変わり」的な状況の激変を語ってしまう) ということの表れだと思われる。
 - 11) アメリカのキャリアラダー論 (Fitzgerald 2006=2008) が日本に紹介されるのも、こうした状況ゆえであろう。
 - 12) 小島 (2008) で取り上げられている不安や疑問 (「今の仕事は続けたくない。だけど、やりたいことも浮かばない」「好きなこと」だから仕事にしたい。だけど踏み出す勇気がない」「正社員じゃなくても大丈夫?」「資格を取って働きたい。でも今からでは遅すぎる?」「キャリアを捨てても転職すべき?」「別世界」に飛び込んでみたら) は、まさにそうした中で浮かび上がってくるものである。

文献

- 石田浩ほか, 2009, 「信頼できるインターネット調査法の確立に向けて」東京大学社会科学研究所SSJデータアーカイブResearch Paper Series, No.42.
- 久木元真吾, 2009, 「若者の大人への移行と「働く」ということ」小杉礼子編『若者の働きかた』ミネルヴァ書房, 202-227.
- , 2010, 「「やりたいこと」の現在」小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在 労働』日本図書センター (近刊).
- 小島貴子, 2008, 『正しい「未来」の選び方』成美堂出版.
- 谷正名, 2009, 「20代男性・「不安」と「情報過多」の中で」『放送研究と調査』59 (10) : 2-33.
- 本多則恵, 2006, 「インターネット調査・モニター調査の特質」『日本労働研究雑誌』551: 32-41.
- 山田昌弘, 1996, 『結婚の社会学』丸善.
- , 2004, 『希望格差社会』筑摩書房.
- Fitzgerald, Joan, 2006, *Moving Up in the New Economy*. Ithaca: ILR Press. (=2008, 筒井美紀ほか訳『キャリアラダーとは何か』勁草書房.)

くきもと・しんご 公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員。主な論文に「広がらない世界——若者の相談ネットワーク・就業・意識」(堀有喜衣編『フリーターに滞留する若者たち』勁草書房, 2007)。社会学・生活経営学専攻。(kukimoto@kakeiken.or.jp)